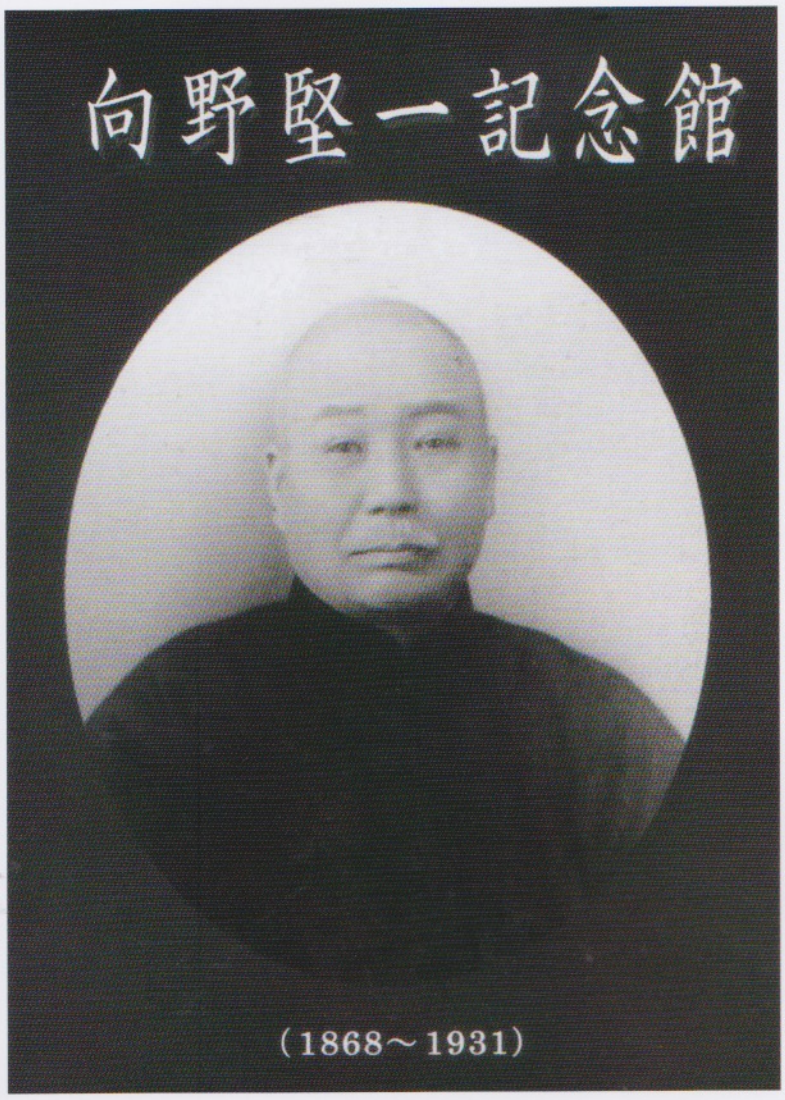
温故知新・第三回

知られざる直方出身の実業家

向野堅一

こうの けんいち



去る九月一七日、市内殿町に「向野堅一記念館」が開館した。

建物は旧讃井医院の内部を改装したもので、外観は病院のころとほとんど変わるところはない。知る人も多いが、讃井医院の建物は木造洋モルタル造りの二階建て、一部三階の塔屋をもつの近代ルネサンス式の洋風建物で、玄関上部にバルコニーを配し、高さを強調したモダンな建物であった。大正十一年（一九二二）の建設であるから、十二年後には築一〇〇年をむかえる。

院長の讃井源次郎氏の逝去後は閉院していたが、このたび個人の記念館として生まれ変わった。明治以来、殿町の一帯は地域の医療センターを目指した炭坑家の貝島太助によって多くの医院・病院が集中していたが、旧讃井医院はその規模からも中核的な存在でもあり、風格ある外観とあいまって、都市の景観を形づくるランドマークであった。

それだけに閉院後の建物のあり方が懸念されていたが、このたび記念館という歴史を語る建物として再生されたことは地域にとっても近年数少ない朗報といえるだろう。

記念館は、その名の通り直方出身の向野堅一に関する品々を展示する施設だが、同氏については地元でもあまり知られていないのが実状だ。彼は何者であったのか。

向野堅一は明治元年鞍手郡上新入村で農家の四男に生まれた。福岡市の修猷館

を病気中退、当時の清国に渡り、その後日清貿易研究所を卒業した。

明治二十七年におきた日清戦争では通訳官として軍に徴用となり、語学力を買われて諜報活動に従事した。日清貿易研究所の同窓で旧若宮町出身の山崎恙三郎ほか二人も同様の活動をしたが、彼以外はいずれも清国兵に捕まり処刑されている。このとき堅一が中国人にかくまわれて難をのがれたのは、その抜群の語学力によるらしい。後年、堅一はこの時の中国人の息子を養育し、日本に留学させている。彼の人柄の一端をしめす逸話といえる。

日清戦争後は商人として頭角をあらわし、明治三十八年には旧満州に移って中国人と合弁で正隆銀行を設立、瀋陽で財界人として活躍した。この間、革命家の孫文とも交流があった。

堅一は昭和六年に没したが、この年に満州事変が勃発した。その後日本と中国は十五年にわたり泥沼の戦争を続けることになる。日中のあいだで活躍した向野堅一という実業家について今日我々が知ることの少ないのは、いわゆる「坂の上の雲」以後の時代における日中間の歴史がいまだに総括できていないことにもよると思われる。南の海では両国間の波が高いこの頃だが、ふたつの国に生きた先人の跡をたどるに恰好の施設として歓迎したい。言いおくれたが、記念館はNPO向野堅一顕彰会が所有・運営する。理事は茨城大学准教授の向野康江氏で、堅一の曾孫にあたり、「中国人と深く交流し、その文化にも通じた堅一の生涯を伝えたい」と思いを述べられている。

直方文化連盟会報　第172号

発　行　平成23年2月13日
事務局　直方市大字頓野3053-12
TEL/FAX0949-26-2697
発行責任者　中村幸代
編　集・デザイン　広報委員会

ホームページ　直方文化連盟　検索